

引率した先生や参加児童生徒の保護者が発表！

「豊かな体験活動」シンポジウムの報告より
羽島郡四町教育委員会



意見交流するシンポジストの先生

Q1 子どもたちのどんな姿が印象に残りましたか？

キャンプファイヤーで素晴らしい体験をさせてくれた御獄の地へ、感謝の気持ちを込めて、「御獄山 ありがとう」の心を伝える出し物をみんなで計画したこと。初めて出会った子どもたちが、班で登山・キャンプファイヤーなどの活動を行ううちに、徐々に連帯感が高まる様子が目に見えて感じることができたこと。

Q2 宿泊体験学習参加後の子どもたちの生活ぶりは？

後期に生徒会役員に立候補し様々な活動を積極的に行うようになった。

下級生に教える姿から、学校とは違う自分が出せ、自分を表現しようと拳手にがんばる姿が見られるようになった。

自分が分からないと言えば、仲間が応えてくれるということを学んだ。最後まで登りきった体験が

ら、学校の持久走で、あきらめずに最後まで走ることができた。

Q3 保護者から見たお子さんの家庭での生活の様子は？

進んでお手伝いをしたり、自分の健康管理に気を付けたりするようになった。花の名前を聞いたり、星に興味をもったりするなど、自然に関心をもつようになった。

登山体験から時間の使い方が上手になり、計画性が芽生えてきた。自分のことは自分で責任をとる姿勢が育ってきた。

Q4 先生自身、自分の力になったことは？

よく言葉にする「がんばりや！」は、こういうことなのかがよく分かった。今後、生徒に指導するときの幅が広がった。

新しい仲間集団の中では、自分から尋ねたり、自分から声を掛けたりすることが大切だと学んだ。

苦勞も多く、ハードルの高い四日間であったが、その分乗り越えた感動は大きかった。

小学四年から中学三年までで体力差があり、苦しみと闘いながらも、全員が登頂できた喜びは大きかった。

豊かな体験と地域の大学が担う役割 「フレンドシップ事業」より

シンポジウムの最後に、岐阜聖徳学園大学の中舎美津男学長と学生ボランティアの渡辺一平さんより講演していただきました。

内的小学生でした。中舎先生は、講演の初めに、「豊かな体験活動」の意義について、

岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センターでは、完全学校週五日制に向け、本年度より「フレンドシップ事業」を行ってまいります。この事業は、地域の小学生一〇〇人が学生ボランティア六〇人と共に体験活動し、子どもたちは生きる力を、学生は教師になるための資質向上を目指したお互いに高めあう活動です。この活動の参加者の半数以上が郡

子どもなりの目的をもった活動であるか。人や自然との必然的な関わりをもつ活動であるか。自分の力で解決する場面がどれだけあるか。感動を共有する体験であるか。体験で手にしたことを家庭や地域社会、学校でどのように位置付けるか。

の五点を強調されました。次に、「フレンドシップ事業」について、年間七回にわたる活動一つ一つをスライドを通して、学生さんの説明を加えながら、分かりやすく説明されました。

「豊かな体験活動」推進事業は来年度で三年目を迎えます。この二年間の成果と課題を生かし実施したいと思えます。



講演はスライドを使い、分かりやすく説明されました

一月二十一日、岐南町中央公民館で、「豊かな体験活動」シンポジウムを開催し、PTAや地域のかたがた、教職員約一五〇人の参加がありました。初めに、「豊かな体験活動」検討会議委員長の下羽栗小学校関係長先生が、本年度の推進事業のあゆみをスライドを使って説明しました。次に、「御獄宿泊体験学習に参加して」と題し、引率した先生（四人）や参加児童生徒の保護者（三人）の皆さんに意見や感想を発表していただきました。発表の一部を紹介いたします。